映画制作ワークショップの取り組み

渡　邊　幸　彦

はじめに

同朋大学では、2009年4月に文学部人文学科映像文化コースを設置したのにあわせ、新たな外部向け講座シリーズとして小中高生を対象とした映画制作ワークショップを企画した。これは、客員教授として招聘した映画監督の中江裕司氏の助言に拠るところが大きかったのであるが、大学と地域とを結びつけ、教育面においての効果も大いに期待できると考えてのことであった。

本企画は、同朋大学が運営主体となり、撮影・オペレーション等担当に地元の映像企画・制作会社の協力を得、さらにフィルムコミッション、映画館などからも幅広くスタッフとして参加してもらうこととなった。当初より、主催団体として「なごやえーぞー実行委員会」という組織を立ち上げたのも、こうした活動が、この地域の映像に関わるさまざまな人材や機関が自由に集い、映像を通じた地域交流ができる場として機能することを願ってのことである。

映像制作を主としたワークショップの取り組みはまだそれほど歴史のあるものではないが、本格的な機材の普及に伴って近年各地で徐々に広がりを見せている。本稿では、先進的に取り組んでいる地域の実態を検証した

上で、本学が取り組むワークショップの実情と課題について報告したいと思う。

1　全国の活動と今

1－1　地域と連携した取り組み

現在各地で行われている映像制作のワークショップは、その設定期間によって大別すると、一ヶ月から数ヶ月にわたって展開する「長期型」、一日もしくは二、三日程度で実施する「短期型」、その中間型ともいえる（数週間程度の）一定期間内で数回の講座を設定する「中期型」の三種のタイプが考えられる[(1)]。また、参加者の学年を、小学生、中学生、高校生それぞれに限定するか、またはミックスするか、という点でもそれぞれの取り組みの特徴を見出すことができる。

以下、実績のある地域の取り組みを、そのタイプごとに見ていくことにする。

1－2　長期型

1－2－1　川崎の事例　「ジュニア映画制作ワークショップ」

十年以上にわたって教育機関と連動した映像ワークショップ活動をしている地域に、川崎地区がある[(2)]。

川崎では、川崎市とNPO法人KAWASAKIアーツ・しんゆり映画祭事務局が主体となって、市内にある日本映画学校（2011より日本映画大学に移行）等の協力を得て、2000年以来すでに十一回のワークショップを開催してきている。

こちらは、実施タイプとしては長期型に分類できる本格的なワークショップである。参考までに2010年に開かれた11回目のスケジュールを提示すると、

7/12（月）　　/ 応募締切り　アイデア作文提出
7/19（祝）　　/ オリエンテーション
7/24（土）、31（土）/ 脚本づくり
8/1（日）～4（水）/ ロケハン、リハーサル、撮影
8/5（木）～6（金）/ 編集作業
8/7（土）～9（月）/ 音付け作業（効果音作り）
8/10（火）　　/ ダビング（総仕上げ）
8/11（水）　　/ 完成作品上映会
10/17（日）　　/「KAWASAKI しんゆり映画祭」にて完成作品上映

川崎の特徴は、応募者に事前に「映画にしたいアイディア作文」（400字）を提出させ、それに基づいて10～20分程度の劇作品を一本作るという目標を設定していることである。（過去には、複数の作品を制作したことや、最長で30分を超える作品となったこともある。）現在は、募集人数は中学生限定で15名、長期にわたる日程のため「原則8割以上の日程に参加が可能」であることを条件としている。

集まった受講生の中で、①脚本・演出班、②撮影・録音班、③制作・美術班、④役者（必要な場合は外部者に出演依頼をすることもある）などの役割分担をし、作品を完成させて上映会を実施するまでを一通り経験するスケジュールとなっている。日本映画学校の協力もあり、技術面も含めて全体的なサポート体制が行き届いている印象がある。プロデューサーが全体を統括し、日本映画学校で指導する映画監督や専門家が指導監督として受講生に付き、同校の学生たちが技術サポートに当たるほか、ボランティアスタッフも多数参加している。すでに回数を重ねているため、過去に受講したOBたちがボランティアで参加していることも強みである。

さらには、ワークショップ締めくくりとしての完成上映会の他に、「KAWASAKI しんゆり映画祭」という一般の観客に向けての作品披露の

場が準備されていることが、この取り組みに付加価値を与えている。

他の地域がここを参考にしたと明言しているように、現在行われている映像ワークショップ活動の中でも、もっとも整備された取り組みだといえよう。

1－2－2　札幌の事例「子ども映画制作ワークショップ」

主催者は、NPO法人北海道コミュニティシネマ・札幌理事長であり映画館シアターキノ代表の中島洋氏。こちらも、中学生を対象とした長期型の本格的な取り組みであり、2010年で四回目を迎えた。スタッフには札幌市内の大学生たちも参加している[(3)]。

簡単に2010年のスケジュールを紹介すると、説明会を5月に行い、5/30より毎週日曜日の午後に定期的に集まって、ほぼ二ヶ月かけて、脚本選び・脚本作り・役者オーディション・ロケハンまでを行い、7月からリハーサル、8月後半に撮影をし、9月の編集（於/ICCインタークロスクリエイティブセンター）を経て、10/25の完成上映会（於/シアターキノ）まで導いていくという、実に半年にも渡るスケジュールが組まれている。10年は募集人数20名に対して、参加者は22名であった。

同スタッフは2009年から「全国中学生映画祭」[(4)] を企画しており、10月の完成上映会の後、11/14の第2回映画祭（於/道立近代美術館）においてワークショップ制作作品は再度披露されることとなった。

札幌も川崎と同様に中学生（1、2年生）を対象としているが、そのことについて主催の中島洋氏は、「ぼくらの場合は、短編映画といっても、『きちんとお話をつくっていい映画をつくろう』という目標を設定しています。そうすると、小学生だとちょっと早いかなと思う。高校生だと逆にできちゃっているから。高校生だからだめということではなくて、逆に、本格的に作るという発想になるので…。短編だけれどきちっとした話のあ

る映画を作るスタートとしては、中学生がいいだろうということです。小学生ならばもっと入門編をやった方がいいと思うんですよ。…」（ウェブマガジン「札幌てくてく 子ども映画制作ワークショップ 2010 札幌」中島洋さんのお話③「ワークショップのいろんな形」2010/11/07 より）と説明している。

札幌の特徴は、手本とした川崎よりもさらに長期にわたってじっくり作品を完成する過程を受講生に経験させていることで、そこには作品のクオリティを第一に考えるという主催者の考え方が反映されている。主催者が映画館主でもあり、最初から商用の映画館で上映するに足る作品に仕上げることが目標になっているという点は興味深い。

また、映画館のある札幌狸小路のバックアップもあり、外に出てロケをし札幌の街を撮るということも目的の一つとなっているようである。

1－2－3　茨城（つくば）の事例 「つくちゅうシネマワークショップ」

「つくちゅうシネマワークショップ」は、筑波大学西岡貞一氏（図書館情報メディア研究科）の取り組みである。こちらは、筑波の中学生（「つくちゅう」）を対象に、川崎同様夏休みの期間を利用した長期型のワークショップであり、2010 年までに四回実施されている。約二ヶ月という凝縮された期間に 18 日間の作業日を設けており、ボリューム自体は前記の川崎・札幌と比較しても遜色ない「集中講義」タイプの講座といってよいだろう[5]。

こちらの特徴は、2007 年の開始時には「つくば市制 20 周年記念事業」の一環として行われ、さらにその後も文化庁支援事業（「文化芸術による創造のまち」08 年度）、「筑波大社会貢献プロジェクト」といった支援体制が整った中で行われていることが挙げられる。主催は筑波大学大学院・図書館情報メディア研究科、共催につくば市・つくば市教育委員会がつき、

筑波大学を主たる会場として行うという、大学主導の講座である。完成上映会も大学内の施設（メディアユニオンホール）で行っており、大学内で完結するスタイルをとることができるのが強みであるといえよう。

受講者は、脚本制作・監督・俳優・撮影・照明・録音・編集の役割を割り振られ、ビデオを用いた作品作りを体験するという枠組みは、川崎・札幌と変わりない。受講者は初回が15名、二回目が18名、三回目が25名と回を追うごとに増やしていったが、四回目となる2010年は9名（男子4名、女子5名）であった。主催の西岡氏はワークショップを行うにあたって、全日程にすべての受講生が参加するのが前提で、15名以下が適当であるとの考えを述べている[(6)]。ワークショップが、撮影・制作の体験をできる限り全員平等にさせることを第一義とする講座だと考えるならば、適正な定員をどのくらいに設定するかを考える上で示唆的ではある。

2010年はそれまで用いていた業務用のHDTVカメラ（PMW-EX1）をやめ、家庭用のハンディカム（HDR-XR）を用いたと報告されている。編集に関しては、コンピュータはiMAC、ソフトウェアはFinalcut2を用いて行ったとのことである。撮影・編集機材の選択に関しては、集まった受講生の傾向、指導体制、指導に費やす時間、狙いとする作品の質などと密接に絡んでくる問題であり、主催者の考え方がもっとも表れる部分でもある。撮影機材の変更は、おそらくはPCとの親和性や編集の手間を考えての措置だったのではないかと考えられる。

1－2－4　その他単発の開催（福島、近江八幡の例）

七九　その他、単発で行われた長期型のワークショップとしては、福島、近江八幡の例がある[(7)]。

福島では、2007年に、3月の春休み期間を中心（上映会は5/6）として、23名の中学生を集めた「映画制作ワークショップ」が開かれた。会場と

なった福島市子どもの夢を育む施設「こむこむ館」では、幼児から高校生までを対象としたさまざまなワークショップを常時開催しているが、本取り組みは中学生を対象とした講座として設定された。地元福島出身の映画監督佐藤武光氏を指導者に迎え、川崎の日本映画学校の協力を得て、土日と春休みを中心にスケジュールが組まれたのだが、事前に原案となる作文を用意させ、そこから脚本をじっくり練り上げた上で、ロケハン、リハーサル、撮影に臨むというやり方は、（日本映画学校が関わる）川崎の方法をほぼ踏襲した本格的なワークショップスタイルを目指したものだったといえる。

近江八幡でも、同じく2007年に「子ども映画づくりワークショップin近江八幡」が開催された。原一男氏（映画監督）をメイン講師、長岡野亜氏（映像作家）をテクニカル面の講師として、5月から9月までの週末を利用して24回に渡って講座を開催した。こちらも、5月に一度プレ講座を開いた上で、6〜7月までの前半12回で企画づくり・脚本制作・ロケハン・小道具準備・キャスティングまで、8〜9月までの後半12回でロケ・撮影・編集・音入れまでを行い、11/23（於/G-NETしが）に完成上映会を開くという、本格的なワークショップスタイルであった。

本講座は、中学生以下を対象（小6から中3まで）とした滋賀で初の本格的な映画作りワークショップと銘打って、近江八幡の市民団体である「地域プロデューサーズひょうたんからKO-MA」が主催し、地域の情報拠点である「マルチメディアセンター」を主会場とし、市やアサヒビール（「アサヒ・アート・フェスティバル2007」参加プログラム）が後援・助成するなど、地域を挙げて十分なバックアップ体制を取ったと思われるが、定員20名に対して（最終的には）7名の参加者に止まった。完成作品は40分にも及ぶ大作となったように、少人数となったことでかえって濃密な指導が得られ、結果として質の高い作品となったのではないかと想像さ

れるが、主催者側としては、当初の見込みとは違った結果だったのではないだろうか。

福島、近江八幡両地域は、目標は高く設定し、一定の成果は上げられたものの、その後連続開催には至っていない。

1－3　短期型

1－3－1　金沢の事例　金沢コミュニティシネマ企画「こども映画教室」

金沢では、「こども映画教室」の名で、装置を工作しながら映画の原理を学ぶ教室（初等クラス）と、映画作品制作の体験教室（中等クラス）とを並行して行っている。この企画は、金沢の映画館シネモンドを核として2003年に活動を本格化させた「金沢コミュニティシネマ」が、翌04年から開始した、小学生たちに様々な映画体験をさせる連続講座から発展してきたものである[8]。

「中等クラス」は、05年夏から秋にかけて実施された「初等クラス」「こども映画サークル」を受講した者を対象に、06年の3月に初めて設けられた[9]。07年からはプロの映画監督を迎えた映像制作ワークショップ方式へと発展させ、07、08年は二日間、09、10年は三日間の日程で計四回実施された。講座の開催場所は、主として金沢21世紀美術館であり、作品撮影のロケ場所としても同美術館が活用されている。

金沢では、地域の映画振興を目指したコミュニティシネマ活動から始まり、こどもへ映画体験を与える方向へ進んでいったという点が注目される。つまり、こどもの教育という視点から出発したのでなく、映画振興のためにはその下支えとなるべきこどもの役割がもっとも重要であるとの視点から出発しているプログラムだと言えるのである。それは、1－2で挙げた長期型のプログラムがいずれも中学生を対象として、技術的なことも一通り体験させることを目指していたのに対し、金沢では小学生のみを対象と

し、技術的なことよりも、短期間の内に、とにかく撮って、つないで、作品をつくってみることの楽しさを体感させることに重きが置かれた取り組みとなっていることからも伺える。

過去四回の講座では、指導に当たった各映画監督が、受講者に対しそれぞれテーマを出して制作に取りかからせている。初回の中江裕司氏は「愛」をテーマにドキュメンタリー班、ドラマ班に分けて各１本、二回目の是枝裕和氏はドキュメンタリー班には「働く」をテーマに３本、ドラマ班には「家族」をテーマに１本、三回目の荻生田宏治氏は「心が動く」を共通テーマに各２本、四回目の諏訪敦彦氏は「もしも～だったら」をテーマに４本の作品を作り上げさせた。

この講座の特徴は、指導する監督が毎年変わることで、ベースとなる仕組みは変えずに年ごとに変化をつけることを可能にしている点にあると言える。結果として、受講生の継続意欲をかき立てる効果も期待でき、実際に本講座では何年か連続して参加している受講生も複数存在しているということである。

１－２で挙げた長期型の取り組みがいずれも中学生を対象にしていたのに対し、金沢が小学生を対象にして十分な成果を上げることができたのも、二日ないしは三日という短期間にまとめて行ったからであると考えられる。低学年のこどもに集中力を切らせず意欲をかき立てるためには短期型の設定は有効な方法であろう。

１－３－２　川崎の事例　「だれでもできる映画ワークショップ」

川崎では、１－２で紹介した本格的なワークショップの他に、川崎アートセンターが主催する主として小学生向けの短期型講座も開設している。春休みと夏休みにそれぞれ「シネマわくわくワークショップ」という企画を用意しており、その中でアニメ、マンガ教室とあわせて、「だれでもで

きる映画ワークショップ」の名で映画制作講座を開催しているのである。

ちなみに09年春は、金沢の初回と同様に中江裕司監督が担当している。二日間で企画から撮影上映会までを体験するというフォーマットは金沢と同じであるが、参加者を小学校3年生から中学生までに広げた点が異なっている[10]。

1－4　中期型

1－4－1　東京の事例　「子ども映画制作ワークショップ／映画の時間」

実施日は四ないし五日であるが、それを何週かにまたがってスケジュールを組んでいる例として、東京フィルメックスが主催する「子ども映画制作ワークショップ/映画の時間」がある。

東京フィルメックスは、2000年から活動を開始した団体で（現在はNPO)、主に映画祭等を企画運営しているが、08年からは子ども向け講座として「映画の時間」を開催している。実行委員会の岡崎匡氏が「当会の目的〈ミッション〉のひとつに「未来性」を掲げており、新進作家への支援とともに未来の映画の観客を育てることの重要性を感じている」[11] と述べるように、映画の振興という視点から起こった企画であったことがわかる。

1－3に挙げた金沢や川崎の例と同じく、こちらも初年度08年には実績のある中江裕司氏を招いての開催となったが、他地域の映画制作ワークショップの実施例を検証し、中江監督との事前協議の上で企画を練り上げたとのことで、長期型と短期型両者の長所を折衷した感がある。

以下実施体制を紹介してみると、08年は3/8、15、16、23の四日間で、初日は、午前中に視覚教材の工作と16ミリ映画鑑賞といった、（金沢の初等クラスで行っていた要素を取り入れ、）映画の基礎を体験させた上で、午後はドキュメンタリー班（3班）ドラマ班（2班）に分けて、スタッフ決め、機材の練習と企画、ロケハンまで。一週間おいた二日目と三日目は、

土日連続で終日撮影と編集。さらに一週間おいた四日目は、編集の完成と上映会までとなる。募集は小学校3年生から中学3年生までの30名[12]。慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ総合研究機構との共催の形を取っており、ロケ場所も含めて大学の施設を活用し、技術面では、特定非営利法人「映画美学校/ちいさなひとのえいががっこう」がサポートしている。

09年は、同じく慶應義塾大学三田キャンパスを会場に、篠崎誠監督を招いて実施されたが、編集の仕上げ用に第三タームを一日延ばして1・2・2の五日体制（3/15, 20, 21, 28, 29）にしたことが変更点である。さらに第三回目の2010年は、国立新美術館と政策研究大学院大学に場所を移して、前年と同様に五日間の日程（3/13, 20, 21, 27, 28）で、崔洋一監督を招いての開催となった。各回ともそれぞれの監督がテーマを出して制作に当たらせている。

なお、本講座は港区文化芸術振興基金助成事業の支援を受けているが、実施するに当たっての活動基盤についてはいろいろな課題があるようである[13]。第四回目（2010/11/23）の開催では、一日で映画鑑賞会（「映画を見る」）とアニメーションの体験講座（「映画を知る」）を実施する方式に改めたのも、そのあたりが影響しているのかもしれない。

2 「スクールシネマワークショップ」

前文にも記したように、本学では2009年より客員教授として招聘した中江裕司監督を講師として映画制作ワークショップを開催している。当初より、大学単独で行う事業というのではなく、名古屋の映画人が映画振興の目的の下に集うことができる場を目指して設立した「なごやえーぞー実行委員会」の主催行事という形を取っている。従って、すでに三回開催したが、基本となるメンバーは固定した上でその都度様々な分野からサポー

トに加わってもらっている。(四回目を 2011/3 に開催予定)

計画立案に当たっては、すでに金沢等で実績のあった中江監督の意見を大いに取り入れているのであるが、本取り組みの特徴は、1−1 の区分の内「短期型」であることと、同じ講師かつ同じフォーマットで(三回)継続している点にあるといえる。初回は一日で撮影から編集、上映会までを行うスケジュールを組んだが、二回目以降は二日間で全行程を行うように変更した。募集については初回は小学校 4 年生から高校生までの 20 名、二回目以降(四回目まで)小学校 3 年生から高校生までの 30 名に設定した。

本学の場合、映像教育の分野で長い歴史を有しているわけではなく、学内に豊富な撮影機材や映像編集設備等を備えているとはいいがたい状況にあるが、ここ数年の撮影環境の変化は画期的なものがあり、プロ用の機材が手軽に扱えるようになったことは、こうした講座を設定するのには幸運であったといえる。撮影用カメラはパナソニックの業務用 AVCCAM シリーズ、編集には Finalcut を備えた MAC の PC を班数に合わせて数セット用意して対応した。機材の選定に当たっては、受講生の扱いやすさと作品の品質のバランスを考慮したが、ここでも中江監督が実際に映画撮影現場で用いた経験が生かされている。

2−1 「スクールシネマワークショップ」の活動実績

初回は、名古屋駅にほど近い同朋大学の研修施設「知文会館」[14] に編集機材・上映用機材を持ち込み、朝から夜までの一日で企画、撮影、編集と上映会までを行った。ドキュメンタリー班とドラマ班とに分け、ドキュメンタリー班は主に名古屋駅周辺を取材し、ドラマ班は会場内の個室と近くの公園をロケ地として撮影を進めた。各班にはスタッフが数名付き添いサポートするが、原則として対象にカメラを向けているときは手を貸さない

と取り決める。撮影に用いたAVCCAMは記憶媒体にSDカードを用いており、ドキュメンタリー班はある程度撮影が進むごとに伝達役スタッフが主会場へとカードを持ち帰り、撮影班本隊が戻ってくる前にオペレーターが撮影素材のPCへの取り込みと粗編集を行っておくという、かなり綱渡り的な方法を取らざるを得なかったのも事実であるが、技術面を担当したスタッフ[15]の豊富な経験がそれを可能にしたと言える。知文会館は宗教行事等にも使う施設であり、畳敷きの大広間にスクリーンを掲げて行った上映会は参加者には好評であったが、やはり一日で全行程を行うには無理があるとの反省から、二回目以降は二日に延ばすこととなった。

二回目は同年8月、三回目は2010年3月に、会場を同朋大学（名古屋市中村区稲葉地町）に移して実施した。基本となるフォーマットは変更せず、初日を企画から撮影まで、二日目を追加撮影と編集、上映会にあてた。ドラマ班は学内と周辺の公園等をロケ地とし、ドキュメンタリー班は基本的に公共交通機関が利用できる範囲内で名古屋市内を移動して撮影を行った。二日目には、初日の終了後に予め粗編集しておいたものを、班ごとに中江監督の指導の下細かくつなぎ直していくという作業を念入りに行い、足りないとなればすぐに追加撮影に向かった。上映会は学内のホール（Doプラザ閲蔵/約100名収容）にて行ったが、大画面で自分たちのつくった作品を見られるのは、受講生にとっては刺激となったようである。

簡単に過去三回の活動実績を紹介することとする。以下、参加者の内訳と班ごとの制作作品のタイトル（時間）を挙げる。

第一回（2009/3/21）参加者20名　会場：同朋大学知文会館 小5（3名）小6（7名）中3（1名）高1（6名）高2（1名）高3（2名）	
Aドラマ（「小さな友情物語」5分）	小5（3）小6（1）中3（1）高1（3）高2（1）高3（1）
Bドキュメンタリー（「和」11分）	小6（3）高1（1）高3（1）
Cドキュメンタリー（「i love you いっしょにいようね」17分）	小6（3）高1（2）

第二回（2009/8/1,2）参加者 20 名　会場：同朋大学（ラボ、ホール）	小 4（5 名）小 6（2 名）中 1（6 名）高 2（4 名）高 3（3 名）
A ドラマ（「仲良し大作戦」4 分）	小 4（2）小 6（1）中 1（1）高 2（1）高 3（1）
B ドラマ（「しゃちょーのいんぼー」6 分）	小 4（1）小 6（1）中 1（2）高 2（2）高 3（1）
C ドキュメンタリー（「キスのはずかしさ～愛に出会うまで～」20 分）	小 4（1）中 1（2）高 3（1）
D ドキュメンタリー（「愛ってなんだろう」11 分）	小 4（1）中 1（1）高 2（1）
第三回（2010/3/21,22）参加者 12 名　会場：同朋大学（ラボ、ホール）	小 3（2 名）小 5（2 名）中 1（4 名）中 2（2 名）高 3（1 名）その他（1 名）
A ドラマ（「愛たいよ!!」5 分）	小 3（1）小 5（1）中 1（1）中 2（1）高 3（1）その他（1）
B ドキュメンタリー（「アツアツカップルキスは子どもに見せるものではない」12 分）	中 1（2）中 2（1）
C ドキュメンタリー（「memories 思い出が愛を深くする」11 分）	小 3（1）小 5（1）中 1（1）

2－2　中江裕司監督の提起するテーマ性

「スクールシネマワークショップ」では三回とも受講者に与えたテーマは「愛」であった。前章で示したとおり、中江監督が金沢、川崎、東京で行ってきたのと共通のテーマである。中江監督はこの間、名古屋や地元沖縄も含めて、「愛」という、つかみ所のない、特に小学生には複雑で難しいであろうと思われるテーマで撮ることを全国で展開してきた。

実際のところ、本講座でも、受講者の中には二回連続もしくは三回全て参加している者もいるのであるが、毎回同じテーマだからと不平を漏らす例はなく、むしろ前はドラマをやったから今度はドキュメントであるとか、同じドキュメントでも違った手法でやってみたいとか、積極的に、楽しんで「愛」を考えようとする態度に、我々がむしろ驚かされた。大人の常識で子どもを計ってはいけないと、改めて考えさせられる所でもある。

金沢や東京では、中江監督の手法を出発点としながら、順次他の監督に受け渡しており、同じテーマを連続して行った例はない。本講座では、三度続けて街中でキスを撮らせるパターンのドキュメンタリー作品作りを促

したが、撮る場所やチームのコンビネーションの違いでこれだけ異なった作品になるのかと、驚くばかりである。

かつ、1で挙げた他地域の取り組みでは、小学生から高校生までをミックスして行っている例はない。常識的には年齢の近いものを集めた方が指導しやすいと考えがちであるが、案外そうとも言いきれない。特に高校生単独だと互いに牽制しあって動きが取れなくなることがあるが、小学生まで交えることで意外なほどに自発性が生まれチームワークが生まれやすいように感じられた。かなり年齢差のある者達がチームを組んで一つのことに取り組むことから生み出される効果を考察する上で、これはモデルケースとなるのではないかと我々は考えている。

ただ、同じ手法、同じテーマでやり続けることに問題があるとすれば、スタッフの側に一種の慣れと飽きが生まれることではないかと思われる。四回目（2011/3/26, 7を予定）を開催するに当たって、スタッフの間で議論のあるのはその点である。子ども達は大人が考えるよりもはるかに柔軟であるのに対して、大人であるスタッフ達がいかに毎回新鮮な気持ちで望めるかという点が問われているような気がしている。

3　ワークショップの課題

3−1　ワークショップを通じたネットワーク作り

ここ数年、全国のワークショップ主催者が集まって、ネットワーク作りをしたり意見交換したりする場が催されるようになってきている。

1−2−3で紹介した筑波大学の西岡貞一氏の呼びかけで、数年前から毎年3月に各地のワークショップ関係者の集いが開催されてきたとのことだが、先に紹介した札幌の中学生映画祭の開催は、この会合の中から生まれたものだということである[16]。これはネットワーク作りの一つの成果といってよいだろう。西岡氏の開催する「シネマワークショップ・サミット in

つくば」は、2009年には川崎、札幌、東京の他、福島、近江八幡の関係者も参加した全国規模の集まりとなり[17]、2010年には、さらに中江裕司監督も参加し、マスコミの注目度も高まることとなった。ネットワーク作りの大切さとともに、映像制作ワークショップの公教育への普及について話し合われたようで、西岡氏は「学校で教師が映像表現を教えられるような方法論や教科書を作ることができればいい」との目標を持っていると、朝日新聞の記事でも報告されている[18]。

2010年秋には、北海道でもワークショップに関するシンポジウムが開かれている。北海道大学では、2006年より「北大映画館プロジェクト」と称して、学内のクラーク会館を利用した上映会「CLARK THEATER」等を学生の運営によって行ってきているが、2010年は「クラークシアター2010」(10/30〜11/4) のオープニングイベントとして、「子どもが映画をとる時代―ワークショップの実践と映像教育の未来」と題したトークイベントが開催された[19]。

ここでも、北大のＯＢで札幌のワークショップ主催者中島洋氏、同スタッフであり札幌在住の映像作家でもある早川渉氏に加え、筑波大学の西岡貞一氏がパネラーとして名前を連ねている。現在、筑波と札幌の連携が全国のネットワーク作りの中心となっており、このシンポのテーマとして「『映像教育』、それは映像を批判的に読み解く力、そして多様で豊かな映像世界を感じとる力を育むこと。子どもを対象とした映画制作ワークショップ講師を務めるゲストをお招きして、その実践から映像教育の未来を考える。」とあるように、教育の面からワークショップを積極的にとらえようという一つの方向性を示しているといってよい。

3－2　公教育との連携の是非

しかしその一方で、同年 11/13, 14 に開催された金沢でのシンポジウム「こどもが映画をつくるとき」（於/金沢 21 世紀美術館）[20] では、ワークショップと教育を結びつけることに関してむしろ反対方向の議論が交わされている。同シンポでは、過去四回のワークショップを指導した三人の映画監督（中江、荻生田、諏訪）等が出席し、二日間の日程で、過去の作品の紹介と、ワークショップと関連した映画・映像教育についてのディスカッションが行われた。筆者も初日の作品上映会に参加したのだが、白熱した議論は二日目の方であったため、実際にその場に立ち会ってはいない。ただ、こちらもマスコミの注目度は高く、当日参加していた各社からその後報告記事が出ているので、その一部を紹介して議論の内容について考えてみたい。

シンポ二日目は「全国からの実践レポート」を受けて、参加者全員によるパネルディスカッションが行われたのだが、「映像のまち・かわさき」を掲げて 2008 年から小学校での映画制作の授業をスタートさせた川崎市のレポートを行った広岡真生氏（川崎市市民・こども局市民文化室）が、現在十校まで広がっているその取り組みで、教師用に「映像制作マニュアル」が用いられていることを紹介したことに対して、パネラーの映画監督三名から疑問の声が挙がったという。

> 同市では撮影方法などを詳しく説明したマニュアルも作って、各学校に配布している。しかし、3 人の監督からは「機材操作のマニュアルは必要だが、テーマの選び方とか、それをどう撮ればいいかなど、映像の中身については必要ない」「撮りたい対象があって、その方法を考えることが大事」など、子どもたちの柔軟な発想を損ないかねないとの声が相次いだ。

学校教育の場合は児童・生徒全員の人間的成長を目的に、総合教育

や国語、社会といった科目として映像を教えるという枠組みがある。これに対し、一般の子ども映画教室では、希望する子どもたちが集まって映画を作る。金沢コミュニティシネマの土肥代表は「映画を見る楽しさ。作る楽しさが目的で、その副産物として成長がある。成長を目的にしてしまうのはどうなのか」と疑問を呈した。

（朝日新聞 2010/12/03/「映画教室　鑑賞型も体験型も」長谷川千尋）[21]

教師用のマニュアルは「企画立案→絵コンテ→役割分担→撮影→編集」といったような手本通りの流れを推進する内容だったそうで、特に小学生のような低年齢の児童に対して「悪しきプロのノウハウを押しつけてはいけない」（中江）などの苦言が呈されたようである。

フランスの例を持ち出すまでもなく、映像教育が学校教育の中でも当たり前の存在になるようにしていきたいという教育現場からの意欲の高まりは、今に始まったことではないと認識している。ただ、実際には小中学校の定まったカリキュラムの中で、そう簡単に新たなことを取り入れることができないという事情と、指導者がいないという現実が立ちはだかって、たとえテストケースだとしても川崎のような形を実現させるまでには至っていないということだと思われる。群馬では（おそらく 2004 年頃から）数年にわたって、映画監督の小栗康平氏が県と協力して小中学校の指導者のための映像講座を開いており、教師向けのテキストも作られたというような例もあるが[22]、それはあくまで例外的なことで、従来映画監督と公教育の接点があまりなかったのも事実である。

公教育の外側で始まったワークショップ活動はまだ歴史も浅く、そこに中江監督をはじめとするプロの現場を知るものたちがようやく目を向けて関わり始めたばかりであるということを考えると、もう少し時間を置くことも必要な気がしている。

3−3　なぜ「映画」か？

テレビを中心としたメディア等が企画したビデオコンテストは数多く存在する。実際劇場公開映画でもビデオカメラを用いた作品作りの比率が増し、家庭用ホームビデオとパソコン等でプロ並みの画質が表現できるようになったばかりでなく、ネットを通じた公開の自由も手に入れた今、技術的にビデオ作品と「映画」とを区別する明確な差はほとんど無くなったといってもよい。

例えば、高校のクラブ活動（放送部）であれば、NHK の主催する「NHK 杯全国高校放送コンテスト」の「テレビドキュメント・ドラマ」部門を目指して映像作品を作るということが一つの目標となっているように、高校生を対象としたビデオコンテストは公的な機関やメーカー、団体の主催するものなど数多く存在する。小学生や中学生を対象とするとなると数は圧倒的に少なくなるが、一般のアマチュアビデオコンテストまで含めれば決して機会が少ないわけではない。家庭用のホームビデオと編集機などを用いて、楽しんでビデオ作品を作る機会は今やほとんどの人に開かれているといってよい。それだけ普及した方法であるのに、それでもなお、これらワークショップのほとんどが、「ビデオ」ではなく「映画」の制作をタイトルとしていることの意味を改めて考えなければならない。

中江監督は「スクールシネマワークショップ」の冒頭で、毎回受講生に向かって、なぜ「映画」を作るのかということについて説明をするのだが、それが誠に明快である。要約すると次の通りである。

「画面と音が組み合わさった『映像』という意味では、映画もテレビも同じ。何が違うかと言えば、それは見ている環境である。映画館で見るのと、家で見るのとでは、自分の気持ちが違う。日常の中にあるのはテレビ、日常ではないものが映画。日常ではない、普段やらないことをやることで、人間はわくわくする。だから、どきどきするものを作りましょう。それが

映画をつくるということだ。そのためには嘘をついてもかまわない。嘘をつかないとわくわくするものにはならない。嘘をついて人を楽しませるのが手品師。だから、みんな手品師になりましょう。嘘をつくことで真実を伝えることが大切なのだ。」

さらに、「ここは学校ではない。だから平等はない。やらなければならないことは、ここには何もない。やらないと損なことはある」のだと伝えると、小学生はもちろん高校生までも、呪縛から解き放たれたように生き生きとした表情になってくるから不思議である。

もちろんこれを教育の方法論の一つだととらえる向きもあるだろうが、学校教育の場で行われているのと決定的に違うのは、映像制作の現場で現役で活動するプロの表現者がこうした活動に加わり始めたという点で、現場を知るプロの言葉は何より重みがあり、そこには教育のための教育ではない純粋な厳しさがあるということなのではないかと思われる。

4　展望

4－1　この取り組みから得られる効果について

「スクールシネマワークショップ」を開催するに当たって、同朋大学となごやえーぞー実行委員会のスタッフの間で取り決めた約束事と目標がいくつかある。以下それらを挙げて、その背景や効果などについて説明することとする。

①　家庭用機材ではなく、本格的なプロ使用の機材をもちいるということ。

作品の品質としてはすぐに映画館の大きなスクリーンで上映できるだけのものを目指すということ。「これはプロが使っているカメラなんだ」と伝えるだけで、受講生たちに機材に対する尊敬の念を呼び起こす効果があり、さらに表現するということへの尊厳を養うことにもつながると考えている。もちろん、細かな機材の調整などは指導役が側に付いて行う。

② 小学生から高校生までの様々な年代が一緒に作業をするということ。

かつての地域社会がそうであったように、年代の違う子どもたちが一緒に集まって遊ぶことは、本来それほど不自然なことではない。小学生から高校生まで年代の幅を広げることで、コミュニケーションのあり方や自分のポジションの取り方を、子どもたちが自然に学ぶことができると考えている。

③ 大人は手を出さないということ。

金沢でも当初からそう取り決めたと中江監督が語るように、スタッフはアドバイスを与えるだけで、距離を置いて見守ることとする。もちろん撮影の許可や後処理を必要とする場面や、危険が及びそうな場面ではその限りではない。自分たちで企画、制作し、発表までを取り仕切ることで、非常に短時間で自主性や協調性が身につくと期待している。

④ 行事を通して学校と家庭、地域とを結びつけること。

ワークショップには積極的に親（祖父母）や学校の先生（クラブ顧問など）の見学を促している。ただし、子どもたちが撮影している最中などは、スタッフ同様、子どもの視界に入らないくらい遠くから見守るということを条件とする。子どもたちを甘やかさず、一緒に行事を体験することで、取り組みに対する理解を深め、継続的な関係を築いていくことを目指している。

⑤ 大学生をアドバイザー役で参加させること。

同朋大学の映像文化コースの学生たちは、日常的には中江監督から指導を受けて作品作りに励む立場であるが、ワークショップにおいては、受講生に一番近い年齢で、監督の意図を十分理解する者として、指導する立場の一翼を担わせている。

⑥ 地域の風景、地域の人を撮るということ。

同朋大学は現在名古屋市中村区に拠点をおく唯一の大学として、地域と

の連携を強めているが、ワークショップにおいても地元中村区（名古屋市西部）の風景や人物を撮った映画を撮り続けていくことで、将来的には地域を表現した映像アーカイブの作成へとつなげていきたいと考えている。

⑦　映像を通して地域の活性化を図ること。

すでに過去三回の作品数は十作品（トータル時間100分）に及んでいる。他地域で行っているような、一般向けの上映会（映画祭）等の開催へとつなげていきたい。

⑧　映画館、映画制作会社、行政、教育機関との連携を強めること。

映画館や映画制作会社などとも利害を超えた関係性を築いていくことを目指している。⑦で挙げた行事も、そういった機関の協力の下、行政（県や市・区、教育委員会、フィルムコミッション等）との結びつきを強くして実現していきたいと考えている。第三回目のワークショップ開催時には、初めて他大学の教員・学生（映像関係）にも参加してもらったが、大学間の連携による相乗効果も期待できると考えている。

⑨　将来的な人材育成を目指すこと。

そして、究極的には、こうした行事を通じて映画に興味を持つ子どもたちが増え、将来的な映画界の振興と映画界の人材の供給につなげていくことが目標である。

そもそも、なぜ中江監督はじめ映画監督がこうした活動に目を向け始めたのかを考えると、その根本には映画界の人材難の問題があるようである。ここ十年の日本映画界は、表面上は興行収入記録が過去最高を更新し、制作本数が年々増加していった一方で、作品の質には疑問符が付き、撮影現場では有能なスタッフの取り合いになるような現状があったという。それは、大学にも多くの映像学科・コース等が生まれ、映像に対する敷居が低くなり、多くの人が映像に関わることができる状況になっているのと、むしろ矛盾した傾向を示しているようにも見える。同朋大学も含め、大学に

おける人材育成の方針については様々なスタンスがあり、映画制作の現場の人材確保に直結するかどうかは難しい面があるが、そもそも根本的に映画を見る「感性」を磨くためは、初等教育の年代にまで遡って直接訴えていく必要があると現場の監督たちが考えたのは、至極納得のいくところでもある。地域と一体になって映画人口の底上げを担い、将来的な人材の育成へとつながる場としてワークショップが機能してほしいというのが我々の願いである。

4－2　今後の展望

本事業主体の一つである同朋大学は、2001年頃から映画プロジェクトを開始し、2002年からは地元のミニシアター（シネマスコーレ）と共同で企画した映画人とのトークイベント「映画座談会」を開催し、映画人との交流を深め、2007年よりは「なごやなかむらエツゾウ映画館」と称した上映会を開催し、コミュニティシネマ活動へと発展させてきた[23]。大学に映像コースを設け、ワークショップ活動を開始したのも、そうした十年に及ぶ映画関係者や地域との交流の結果であったといってよい。

東京などの都市部においてさえミニシアター系の映画館が次々に閉館に追い込まれる状況の中で、子どもたちが、宣伝に踊らされず、いいものはいいと言える感性を身につけることこそが、優れた映画を生み出していく原動力になるはずである。その一つの方法としてワークショップが突破口となることを我々も期待している。ただ、ワークショップ的な方法は、公教育の枠組みの外にあるからこそ、しがらみがない分有効であり、早急な公教育との密接な連携や公教育の中への導入には慎重であるべきというのが我々の当面のスタンスである。

それよりも、他のネットワークとの連携を現在は模索している。同大学は、真宗大谷派東別院（名古屋市中区）を核とした中部地区におけるお寺

のネットワークを有している。歴史的にもお寺は各地域地域の人と文化、さらには様々な年代の人々を結びつける役割を担ってきたが、今後はさらにその機能が重要視される時代になっていくことが予想される。お寺の人が集いやすいという性質と、こうしたワークショップ活動とは結びつきやすい部分を持っているのではないか、さらに、お寺の独特な空間性を利用したイベントの企画などにもつなげていけるのではないかと考えている。

他の地域においても映像制作ワークショップ自体が利益を生むような行事でないことは理解した上で行っており、「スクールシネマワークショップ」においても、大学からの補助の他はほとんどがボランティアで運営しているのが実情である。関わっているスタッフたちの熱意が運営の原動力ではあるものの、安定して継続していくためには経済的基盤の確立も求めていかなければならない。そのためにも様々な分野の機関等からのサポートは不可欠であり、他地域にはない運営モデルを模索していきたいと考えている。

注

(1)　全国コミュニティシネマ会議 2008 in 仙台（2008/8/29,30）　分科会５：子どものための映画映像教育（パネラー/是枝裕和（映画監督）、岡崎匡（特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会）、村山匡一郎（映画評論家）、土肥悦子（金沢コミュニティシネマ・シネモンド代表）、南育子（東京図画工作研究会副会長・東京都墨田区立堤小学校教諭））報告資料より

「資料２　事例報告：子ども映画制作ワークショップ（「映画」の時間）2008 を実施して」で、岡崎匡氏は「１日もしくは２日間で実施する短期型、数ヶ月にわたって土日を使ったり、合宿生活を通してじっくりと作り上げる長期型と比較すると、３週末・４日間の〈「映画」の時間〉は中期型とでも分類される。」と述べている。

(2)　http://www.siff.jp/参照。

(3)　ウェブマガジン「札幌てくてく　子ども映画制作ワークショップ 2010 札幌」など参照。

(4)　全国中学生映画祭は、映画ワークショップに取り組んでいる札幌（「子ども映

画制作ワークショップ」）川崎（「ジュニア映画制作ワークショップ」）筑波（「つくちゅうシネマワークショップ」）東京（BunB「中学生の映画塾」）の四団体が集合して、2009/11/21 に初めて札幌（道立近代美術館講堂）で開催された。第二回目は、2010/11/14 に開催され、同四団体の作品が上映、176 名の参加者があった。

(5) 以下は、筑波大学ＨＰ（http://www.tsukuba.ac.jp/）、『日本映像学会会報 153 号』（2011.1.1 発行）映像教育研究会報告「つくちゅうシネマワークショップ上映会」（為ヶ谷秀一）などを参考にしてまとめた。

(6) 『日本映像学会会報 153 号』p.5「つくちゅうシネマワークショップ上映会」（為ヶ谷秀一）参照。

(7) 以下、福島については、筑波フォーラム 76 号 p.56～59（「特集 国立大学法人の理想と現実③研究・社会貢献/ワークショップを通じた地域の子ども達の創造性育成支援」）、福島市子どもの夢を育む施設こむこむ館 HP（http://www.comcom-fukushima.jp/）、NHK 福島放送局キャスター通信ＨＰ（http://www.nhk.or.jp/fukushima/caster_tushin/l.html）など、近江八幡については、子ども映画づくりワークショップ近江八幡ＨＰ（http://multimedia center.jp/eiga/eiga_top.html）、ひょうたんから KO-MA ブログ（http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/）などを参考にしてまとめた。

(8) 以下は、金沢コミュニティシネマＨＰ（http://kanazawa-comcine.to.cx/）、全国コミュニティシネマ会議 in 仙台（08/8/29・30　於：せんだいメディアテーク）報告資料（分科会５：子どものための映画映像教育）、シネモンド・ブログ「こども映画教室」（http://d.hatena.ne.jp/cine-monde/）などを参考にしてまとめた。

(9) 2006 年（2005 年度）は野中真理子氏（TV ディレクター、映像作家）が指導に当たった。

(10) 以下は、映像のまちかわさきＨＰ（http://www.eizonomachi.com/）、川崎アートセンターＨＰ（http://kawasaki-ac.jp/）などを参考にしてまとめた。

(11) 全国コミュニティシネマ会議 in 仙台報告資料（分科会５：子どものための映画映像教育）資料 2「事例報告：子ども映画制作ワークショップ〈映画の時間〉2008 を実施して」岡崎匡より。

(12) 応募は約 120 名あり、実際には 42 名で行ったとのことである。

(13) 技術サポートに当たった「映画美学校」は、有志で子どものための映画教室を行っているが、独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」の事業仕分けによる廃止論に翻弄され、活動基盤を考え直すことになったという。（「事業仕分けで廃止危機にあった「子ども映画制作ワークショップ」今年は開催！

崔洋一監督、子どもと映画づくり」シネマトゥディ HP/http://www.cinematoday.jp/page/N0023451）

(14) 知文会館（名古屋市中村区則武）は名古屋駅新幹線口から徒歩5分の位置にある同朋大学の研修施設。

(15) 技術スタッフは、名古屋の映像制作会社フロムゼロとバモスクルーに協力を仰いでいる。

(16) ウェブマガジン「札幌てくてく　子ども映画制作ワークショップ2010札幌」2010/11/10「中島洋さんのお話④」より。

(17) 2009/3/20、筑波大学春日キャンパス橘アトリエにて開催。参加者は、西岡貞一（つくば）の他、千葉茂樹（日本映画学校）、野々川千恵子（川崎）、佐藤武光（東京）、中島洋（札幌）、佐藤憲吉（福島）、長岡野亜（近江八幡）、月野木隆（つくば）など。

(18) 朝日新聞2010/4/19付【文化】紙面より「子どもたち映画制作体験/各地でワークショップ、表現の楽しさ学ぶ」（増田愛子）より。

(19) クラークシアターＨＰ（http://www.clarktheater.jp/ct2010/）参照。

(20) 映画館シネモンドＨＰ（http://www.cine-monde.com/）などより。

(21) 朝日新聞2010/12/03付 見聞考より。同シンポのレポート記事は、日本経済新聞2010/11/22付 夕刊文化欄「子どもが映画作り 生き方も学ぶ」（古賀重樹）、中日新聞2010/12/03付「各地で試行さまざま 子どもが見せた創造力」（鈴木弘）の他、Yahoo映画（http://movies.yahoo.co.jp/m2?ty=nd&id=20101122-00000015-flix-movi中山治美）の詳細なレポートがある。

(22) わたらせフィルムコミッション等のインフォメーションで、「映像リテラシー講座」（小栗康平監督プロデュース、群馬県主催）について、「県内の小中学校などで、映像の教育を取り入れるための画期的な企画（2004/10）」との紹介がある。小栗康平オフィシャルサイト（http://www.oguri.info/notes/2007/10/index.html）でも、「小学校の教師に向けて、子どもたちに映画を教えるためのワークショップを数年にわたって続けている。現在、毎年2〜3校が実践校として映画の授業を行っており、映画館のない地域の子どもと大人のための上映会（体育館や講堂でチャップリンやノルシュテインなどの作品を上映）も行い、映画教育のためのテキストなども作成している。」との紹介がある。現在継続しているかは不明。テキストも未見。

五九

(23) 「映画座談会」は、同朋大学で2002/9から2008/7まで継続して行ってきたトークイベント。映画監督としては、小栗康平、磯村一路、柳町光男など、俳優の田中要次、映画音楽の大友良英、特殊造形の原口智生、人形アニメーションの川本喜八郎などの様々な分野の専門家各氏をゲストに招いて、シネマスコーレのスタッ

フ・大学の教員を含めた気軽な座談会形式のシンポジウムとして通算十七回開催した。また、「なごやなかむらエツゾウ映画館」は、2007/9 より開始したデジタル映画上映会（一部フィルム）。大学のホール（Do プラザ閲蔵ホール）を用い、アジア映画を紹介するシリーズとして、2011/2 までに通算三十回開催した（継続中）。2008/1 よりは作家の連城三紀彦氏、映画プロデューサーの李相美氏の映画解説を加え、地域の人たちに定着したイベントとなっている。